

彼女の生き方 ~Five Stories~ (後編)

あまのダイアログ 13

自 分だけではない、 機縁の力

飯島▼あら、市橋さんのお子さん、ニコニコして(笑)。お話を参加してるのかなあ。

市橋▼外面はいい子だから(笑)。生まれて半年を過ぎ、だいぶ楽になったけれど、初めての子育ては思うようにならないことばかりで、身心ともに大変な修業になりました。でもその経験のおかげで、育児の悩みを抱える多くの親御さんたちとも気持ちを通わせることができると思います。出産を通して、母親としての立場から活動の幅が広がります。

三須▼私も、得度のみで(僧侶とも一般人とも)どちらともつかない、今の立場だからこそ見えるものや感じるものを通して僧俗双方の橋渡しができた……と思うと、僧侶として明確に進むべき道が見えないうちは、今のようないつちつつかずな状態も良いのかな。

飯島▼自ら望むと望まないに関わらず、置かれた立場や環境で活動の幅が広がることはあるかもしれませんね。

高丘▼私は寺の出身といっても、亡くなった師匠は伯父でした。師匠は長らく重いパーキンソン病を患っていて、口からは

一切の摂食ができなかったり、病状の進行とともに変わって行く姿態を見ると、命をつなぐことの酷い一面を痛感しました。思いあまつて人工呼吸器を止めようとしたこともあるほどです。血縁であつても親子ではない師匠では、気持ちの上で距離の取り方が難しく、延命治療によって、人間としての「生活の質」を奪ったかもしれないと思うと申し訳なく、つきつきりで付き添わなければいけないのに、「法務が忙しい」とか言い訳ばかりして、ろくに見舞いにも行きませんでした。その経験があるからこそ、人が生きる場面に僧侶として出来る限り寄り添っていたい、と強く思うんです。弟子として師匠を送りきれなかったことが、私の原点かも知れません。

女 子会」という 括りすら……

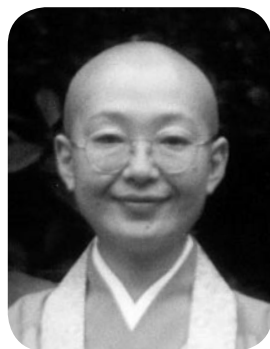
飯島▼曹洞宗に限らず、お坊さんの世界って建前が重視されまますよね。その分、普段言いきかない本音や聞いてもらえない主張って多いと思うけれど、どうですか？

高丘▼この女子会に出てきて言うのもなんですけれど、本音では、僧侶の中で男性・女性を分けて語ること自体に違和感を

覚えるんです。それこそ、僧侶という建前では同じなのに「尼僧」と呼称されて分類されるのが嫌で、単純に性差を問わず「和尚」で良いじゃない、って思います。女性だと思われることが嫌だということではなく、わざわざ言葉で分けなくても、女は女だし男は男。無理に性別を誇示して区別する必要はありません。世間では「女は捨てたんでしょ」だとか「女の人は気が利いて」みたいな、筋違いで都合の良い女扱いが多いですよね。「女子の跡取り」だったり、もっ



「女性のための仏教プチ修行」を企画し、参加者に声明を解説する(緑川)



みどりかわ みょうせい 緑川明世

天台宗僧侶。東京都生まれ。深大寺(東京都調布市)職員。国際仏教婦人会(ILAB)役員。『女性と仏教 関東ネットワーク』会員。精進料理やマクロビオティックを学び、1988年に得度。2001年から、毎年南インドに再建されているチベット仏教僧院『デブン寺ゴマン学堂』に短期滞在しながら經典を学んでいる。共著に『ジェンダーイコルな仏教をめざして』(女性と仏教 東海・関東ネットワーク編 朱鷺書房)。